

# 教務だより

2017年11月号  
茗溪塾

茗溪塾教務部 03-3659-8638

## アクティブ・ラーニングでなければダメな理由

茗溪塾塾長 宇野雅春

私の授業は、若い時から「うるさい」と言われてきました。生徒が活性化していて、「ハイハイ！」とよく手が上がる授業が良いと思ってきたので、どうしても強制型の先生のように生徒に君臨するスタイルが苦手…信条も「生徒には負ける！」と決め抑圧になる授業は避けようと考えていました。でも、塾長で年も取っているとなれば、生徒も若い先生にそうするようにじゃれついたりはしないし、一線を画すようになってきます。なぜか「シーン」としてしまいう授業も多くなって何時しかそれにも慣れたのですが、よく考えてみると、昔の方が成績が上がっていたような気がしてならないのです。そこでシーンと聞いている生徒に不意打ちのように指名してみました。「〇〇君！今先生が言ったこと言ってごらん…？」…「……？」気を取り直してそれでは「△△さん、どうですか？」…「えっ…なんだったっけ？」…ガーン！静かに聞いているようで誰も聞いていない。受験勉強もスタートの時期はそれなりに集中はあるのですが、学校も含めれば授業はたくさんあるわけで、そのどれにも集中するのはさすがに難しいものです。それでも「発見学習」や生徒との共同作業、一人一人に解かせる方法は今叫ばれているアクティブラーニングの要素でもあります。

少なくとも生徒の授業参加が可能でなければ、アクティブラーニングは成立しないわけで、恐怖の体系で黙らせる方法論では、逆に生徒の学習の芽を摘むことになります。生徒の意欲と先生の指導の方法が見事に一つの形になり成績アップにつながるまでには、やはり時間が必要です。

塾は学校ではないので最初の見た目がどうしても優先されます。絵に描いたように自分から進んで学習のできる生徒もたくさん見てきましたが、そういう子ほど、抑圧の体系の中では、学習意欲を失います。

できない子たちは、強制に次ぐ強制で刷り込むように教えられ、ある程度まではいくけれど究極の勉強嫌いになることは間違いありません。なぜなら、親からは「あなたは、やればできるはず！怠け者…」と否定されながら仕方なく取り組む勉強では、心に傷がつくだけでうまくいくはずがないのです。親との関係も一時的ですが崩壊します。好きなことならたくさんできるのに！嫌なことだからやる気にならない…しかも「あなたは、ダメ人間」というレッテルをはられる…子供はそう考えています。そういう子ほど、やりたいことを見つけたときに、大きな力を発揮します。詰め込みの勉強から将来の糧にできる学習へ！がアクティブラーニングだと思います。勉強を面白くし「学ぶ」という本来の意味を取り戻すこと。学校も塾も取り組むべき重要課題と考えています。